

スクールカウンセラーは学校現場での協働をどのように体験しているのか

－ 担任教師、養護教諭との協働に焦点をあてて －

下 田 史 絵

問題と目的

近年、児童生徒を取り巻く問題の複雑多様化や教師の多忙化が深刻となっている。これを背景に、中央教育審議会(2015)は「チームとしての学校」の実現を掲げ、スクールカウンセラー(以下SC)を将来的に正規職員として規定し職務内容等を明確化することや、日常的に相談できるよう配置の拡充をすること、資質の確保を検討することを明示しており、SCの活動の必要性は、ますます高まっていると考えられる。では、SCの活動はどのように行われているのだろうか。

SCが学校現場の中で支援を行う上では、学校・教師と協働することが必須であるといえるが、そこには、さまざまな課題が蓄積されている現状がある(e.g., 荒木・中澤, 2007; 江村, 2011; 小林, 2008)。なかでも、SCと学校・教師との相互理解の必要性は繰り返し指摘され(e.g., 伊藤, 1994; 岡田, 2001; 田中・内野, 2010)、近年では、相互理解の必要性を踏まえて、高嶋他(2007)や新井・庄司(2014)により、SCや教師、または養護教諭が、児童生徒をどのように理解しているかについて、共通点や相違点が明らかにされる等、研究が積み重ねられている。一方で、岩田他(2008)は、学校現場で直面している問題や学校心理学的知識のニーズは職種によって異なることを見出しており、それぞれの職種で役割が異なり、学校現場で置かれる境遇も異なることを示唆している。

以上のことから、SCの活動において、児童生徒をどのように支援するか、また、どのように協働するかということは、SCの役割や境遇が関連していると考えられる。さらに、その関連を明らかにすることは、SCの特性を多角的に捉えられることに繋がり、学校・教師がSCへの理解を深めるための一助にもなるであろう。しかし、そのような研究はほとんどみられない。

そこで本研究では、児童生徒の支援において中心的役割を担っている担任教師、養護教諭との協働に焦点をあてて、SCが学校現場で児童生徒を支援していく際、どのように協働しているのか、

そこにはどのようなことが関連しているのかについて明らかにすることを目的とする。

方法

調査期間 2016年9月～10月

研究協力者 SC経験年数5年以上のSC3名

手続き 研究の趣旨や倫理的配慮について、研究協力者に紙面と口頭で説明し、同意を得た上で調査を行った。面接を行う前に、情報として、年齢や性別、SC経験年数、臨床歴、SC以外の勤務先を尋ねた。面接は、半構造化面接で、1時間～1時間半程度実施した。また、研究協力者から許可を得た上で、面接内容はICレコーダーに録音された。

調査内容 児童生徒の問題解決のために、担任教師や養護教諭と協働して対応した実際のエピソードについて、あらかじめ用意していた質問項目をもとに尋ねた。

分析方法 本研究では、文字テキストデータを定性的コーディングし、コードや概念のカテゴリーとセグメントの文脈を繰り返し参照しながらデータを集約していく、佐藤(2008)の質的データ分析法を用いて、分析を行った。

結果と考察

データ集約の結果、721のセグメントに分けられ、それらは、341のオープン・コード、77の焦点的コードに集約され、20の概念のカテゴリーにまとめられた。以下、結果の一部について、概念のカテゴリーを【 】、焦点的コードを『 』、オープン・コードを「 」として示す。

まず、SCがどのように協働しているかについて、

【SCと担任教師の協働】では、焦点的コード単位において、SCから担任への助言に関する内容が圧倒的に多い結果となった。また、SCの専門性からみた特徴的な結果として、『SCから担任への心理的配慮』が挙げられ、「担任の空き時間を見計らって声をかける」、「担任を労う」、「担任の困っていることを共感して聞く」、「担任が疲れてしまわないようにフォローを密にしていた」、「チームで対応する大変さを聞く」、「担任への肯定的評価」から構成されていた。これらの結果が

ら、SCは担任が児童生徒を支援しやすいようサポートしていることが窺えた。

【SCと養護教諭の協働】では、『SCから養護教諭へ学校全体への介入への協力』『養護教諭と、今後SCにつなげる必要のある人を検討する』という、担任との協働にはみられなかった焦点的コードが見出されており、学校全体への介入やSC活動の全体において、養護教諭が協働相手となることが窺えた。また、養護教諭に対しても、『SCから養護教諭への心理的配慮』が見られ、その詳細としては、「養護教諭への労い」、「養護教諭への肯定的評価」から構成されていた。

【SCと担任と養護教諭の協働】では、『担任、養護教諭からSCへの協働行為』『SCから担任、養護教諭への協働行為』『SCから担任、養護教諭へ肯定的評価』で構成された。「対象生徒の状態を見てSCの面接に繋ぐ」といった『担任、養護教諭からSCへの協働行為』や、「対象生徒の頑張りを見守り、フィードバックしてくれていた」という『SCから担任、養護教諭への肯定的評価』が見られていることから、SCの勤務形態上できない部分を担任や養護教諭がすることへの有り難さを認識していることが窺えた。

SCの協働に影響していることとしては、【協働における位置づけ】、【対象生徒の支援における困難】、【協働における困難】、【SCの活動を機能させるための工夫や働きやすさ】の関連が窺えた。以下、これらの関連について、焦点的コードとオープン・コードから考察していく。

まず、SCは、「新しい視点からのかかわり」を自ら『SCの位置づけ』としており、そのため、「生徒の情報だけでも見立てられる力を養う」という『SCとしての専門性の確保のための工夫』をしていた。しかし一方で、他機関との連携については、「心療内科の受診を勧めるか迷う」という『SCが対象生徒を支援する上での困難』も抱いていた。

また、SCは「サポート的役割」であるため、「対象生徒への支援が教職員の支援観に左右される」という『SCが教職員と共に対象生徒へかかわる上での困難』を抱えていた。

そして、SCは、「生徒に還元できるように教職員に分かってもらうこと」を『SCの位置づけ』として認識しているが、「教職員との関係づくりの難しさ」を感じていた。そして、「教職員との関係性を大切にする」という思いをもって協働しており、「担任に会えなくても養護教諭に繋いで

もらったり、メモを残したりと、しっかり伝える」、「慎重さと正確さに気をつけて伝える」という工夫をする中で、教職員に伝えていこうとしていることが窺えた。

さらに、SCは、「家庭と学校を繋ぐ役割」であると認識しているが、「SCからの要望で保護者面談をするのはハードルがある」と感じていた。また、「家庭への助言は担任に任せる」と家庭への助言は、協働において『担任の位置づけ』と捉えていることが窺えた。

また、SCは、協働していく中で「時間の枠がない中で話を聞くことを求められる」、「対象生徒にどう対応していいかわからない」という『担任が対象生徒を支援する上での困難』を目の当たりにし、『担任の位置づけ』として、「生徒の日常生活全体をみる」、「個も集団も見る必要がある」と認識していることが窺えた。その他にも、担任に対して、「授業中などで保護者と会えない」、「学校に良い印象を持っていない家庭にどう協力していいかわかる」といった『担任の保護者との関係性に関する困難』や「学校組織の中で支援するきつさ」、「一人で対応するのも大変」、「規模が大きいとSCの面接をしたかどうかの情報が把握しきれない」といった『担任の学校組織の中で支援することの困難』を抱えていると認識していることが窺えた。

そして、養護教諭に対しては、「学年が上がっても継続して繋いでくれる」、「(SCが)お願いしたことを繋いでくれる」、「学校組織の中で一番SCと近い視点で気づく」と位置づけており、「養護教諭から気になる子の情報をもらっておく」という工夫を行っており、協働上の重要なキーパーソンと位置づけていることが示唆された。

総合考察

SCが児童生徒の問題解決のために担任教師や養護教諭と協働した実際のエピソードをインタビューしたことで、SCの活動を包括的に捉えることができた。それにより、SCが児童生徒を支援していく上で、家庭を協働相手として認識していること等、先行研究では明らかにされなかった点を示唆することができた。

SCが担任教師や養護教諭に、心理臨床家としてどのような視点から協働しているのか、また、どのような位置づけや困難の中で協働しているのかを明らかにしたことで、SCに対する理解を深めることが可能となり、学校・教師がSCへの理解を深めることに寄与するだろう。